

# 卒業

作・大橋 秀和

登場人物

倉本章子

10年前の事故で大きな怪我をする。気が強く、小学生時代はクラスの中心的存在だった。

佐々木啓太

10年前の事故を起こした張本人。口下手で普段は気弱だが、自分が決めたことは譲らない頑固な面がある。

湯山薫

倉本と仲が良い。頑なで他人をあまり寄せ付けないところがあり、クラスの中では浮いた存在だった。

芹澤源

佐々木と同じ高校に進学し、仲が良い。社交的だが自分に自信がなく、他人に流されやすい。

鴨木大輔

真面目な優等生。クラスのまとめ役。

工藤俊平

陽気なお調子者。周囲の空気が読めないことが多い。

森崎さおり

明るくおしゃべりなクラスのムードメーカー。

若菜良子

朝峰小学校で事務作業のバイトをしている。ファッションから喋り方までどこかズレたところがある。

朝峰（あさみね） 小学校の図書室。  
狭い空間に雑然と本が並べられている。

部屋の奥に窓がひとつ。

閉ざされたガラスの向こうから、

柔らかな三月の日差しが差し込んでいる。  
もうすぐ夕暮れだ。

佐々木啓太が図書室に入ってくる。

しばらく懐かしむように室内を眺め回した後、  
部屋の奥へと進みゆっくりと窓を開ける。

窓から身を乗り出して景色を眺める啓太。

外からは合唱の練習の音が聞こえてくる。

森崎さおりが入り口から部屋を覗き込む。

しばらく啓太の様子を伺った後、声を掛ける。

森崎 …… 佐々木くん？

啓太 …… 森崎……さん？

森崎 うわっつ。啓くんだ！

啓太 （苦笑して）久しぶりに呼ばれた。

森崎 だって……中学以来？……あっつ違う、野球の……。

啓太 ああ……3年の時だっけ？

森崎 やっぱ気づいてたんだっ。無視したでしよ。

啓太 や、だって。試合中だよ？

森崎 ちよっと！対戦相手のエースに声掛けるのにどんだけ勇気いったと思ってるの！

啓太 ……ごめん。

（啓太の顔をしげしげと眺めながら）……佐々木君ってさっマツジュンに似てる  
とか言われない？

啓太 ？

森崎 似てるよ絶対。ねえねえ、ちよっと横向いて。

森崎、啓太に横を向かせる。

森崎 ほらっつ、やっぱ似てる……。さっき入ってきた時（外を向いてるのを見て）び  
っくりしたもん。ね、言われたことない？

啓太 いや別に……。

森崎 似てるよ絶対！ちよっとお……何、勝手にイケメンになってんのお！？  
……。

森崎 (甘えるように) ねえねえ、あの時のラブレターは今でも有効？

啓太 ……えっ？

森崎 もっつ、嘘だつて。だつて今、涼ちゃんと付き合ってるんでしょ？

啓太 !

森崎 いつも2人一緒にいるって、お母さんが。

啓太 いや…別に付き合ってるとか、そういうんじゃないよ…たまたま学校が一緒だったから、良く会ってるってだけで…。

森崎 何それ。じゃあ今、彼女とかいないわけ？

啓太 ……いる。

森崎 いるんじゃない！

啓太 あつ、あの…彼女のことは芹澤さんには言わないで欲しいんだけど…。

森崎 ええ〜何、二股〜っ！？

啓太 いや…だから、芹澤さんとは…付き合ってる訳じゃないんだけど…そういう事言う関係でもないってどうか…。

森崎、冷たい目で啓太を見る。

啓太 (焦って)…や、だつて、別に告白とかされた訳じゃないし…。普通に幼

馴染じゃん。改まって言うのも変じゃない？

…(からかうように) サイテー。

…。

(冗談めかして) じゃあ、ついでに私を3人目の女にしてよ。

や…。

モテモテなんだもん、もうひとりくらい、全然オツケーでしょ？

森崎がふざけて啓太に擦り寄る。

芹澤涼が部屋に入ってくる。

慌てて離れる2人。

芹澤 森崎…さおりちゃん？

あ〜っ、涼ちゃん！ひさしぶり〜っ！

芹澤に抱きつく森崎。

芹澤 ……(少し戸惑いながら) 中学卒業以来だね〜。

森崎 ねえねえ〜。啓くんがいつの間にかすごいイケメンになってんだけど…。

芹澤 そうだよね…高校の時からモテモテだったよ。

森崎 いいなく格好いい彼氏がいて。

芹澤 えっ？

森崎 付き合ってるんでしょ？2人は。

啓太、慌てるが何もできず黙っている。

芹澤 (啓太を気にしながら) え……ちよっと待って。別に……付き合ってるとか、そんなんじや……。

森崎 そうなの？だってお母さんが、いつも一緒にいるところ見かけるって。

芹澤 それは！学校が一緒だったからたま……。

森崎 えくでも仲良いんでしょ、だったら付き合っちゃえばいいのに。お似合いだよ。

芹澤 ……(俯きながら) そんな、駄目だよ。私なんて全然釣り合わないし……。

森崎 じゃあ、私が奪っちゃおうかな。

芹澤 え……あ……そりゃ、もし佐々木くんが……。

啓太 (話をさえぎって) 他のみんなは？

芹澤は一瞬ニヤリと啓太を見る。

芹澤 ……鴨木くんたちは職員室で話し込んでたよ。

森崎 なんだよー言いだしっぺが遅刻かよ……。(壁際に駆け寄って窓の外を見る)……

あゝ駄目だ、ここからは見えないや。

芹澤 (窓の外を見て) あ……新しい公会堂ってあんなに大きいんだ……。

森崎 あんなの朝峰には要らないっつーの。ああいう無駄なもんつくるから学校がなくなっちゃうんだよ。

……。

啓太 (窓に寄りながら) そうだよね……。でも、公会堂の建て替えがなかったら、朝峰は本当に仕事なくなってたって……。

森崎 そんなの知るかっつーの。朝峰中が失業者で溢れる方が、私の大切な母校が無くなるよりよっぽどマシだよ。(壁や本棚を触りながら) ああ……可愛そうな私の朝峰小学校。ごめんね、守ってやれなくて……。

芹澤 そうだね……寂しいよね……。

芹澤の言葉に、しばらくしんみりとする3人。

森崎 (再び窓の外を見て) あれっ？あれ私ん家じゃん。

えっ？どれどれ？

森崎 ほらっ、あの、鉄塔の左側！

えくどれだろ……。あの点滅してる看板の方？

森崎 そうそう。あれ、工藤君とこのパチンコ屋じゃん。

あ……本当だ。

森崎 へえく。ここからあんなとこまで見えたんだ……。全然、知らなかった……。

啓太 ……見えなかったんだよ、昔は。

芹澤 ？

森崎 ……あつ！

啓太の言葉で何かに思い当たったのか、表情を凍らせる森崎・芹澤。

しばらく沈黙。

部屋の外から話し声が聞こえる。

やがて、鴨木大輔と工藤俊平が部屋に入ってくる。

森崎 ちよつとおく。遅いっつ！

鴨木 ごめんごめん、シゲ爺に捕まっちゃって……。

各自バラバラに「久しぶり。」「元気だった？」等の挨拶を交わす。

森崎 （工藤を見て）あつ、ザビエル！

工藤、あだ名にちなんだ寒い一発ギャグをする。  
全員引く。

森崎 見事に成長してないんだけど……。

鴨木 いや……ある意味、着実にレベルアップしてるよ。

工藤 やっぱり！？

鴨木 （工藤を無視して）ほらお土産っ！

鴨木が、手に持った「クリスピードーナッツ」の箱を開ける。

森崎 きゃあ〜っ！なにこれ〜っ！

鴨木を除く全員がドーナッツの周りに集まり大騒ぎでドーナッツを取り分け始める。

鴨木は「クリスピードーナッツ」について必死で説明（日本に上陸したばかりで東京にもまだ数店舗しかないこと、みんなに出来立てを買って来ようと、今朝早起きして行列に一時並んだこと、食感が普通のドーナッツとは全然違うこと……等々）するが、みんなドーナッツに夢中であまり相手にしない。

少し不機嫌そうな顔になる鴨木。

ひとしきりドーナツが行き渡り、やや部屋が静まったところへ、  
また合唱を練習する声が聞こえてくる。

森崎 あっ、懐かし〜っ。

芹澤 本当……明日の式で歌ってくれるのかな？

全員しばらく合唱に耳を傾ける。

啓太 これ何人くらい（で歌ってるん）だろ……？

鴨木 全学年で12人だった。

芹澤 ……最後の、朝峰小生だね。

皆がしんみりとしたところで、

工藤が突然、合唱曲を歌い始める。

テノールのパートらしいが、微妙に音程が間違っている。

芹澤 （正しい音程で歌ってみせる）〜だよ。

森崎 よく覚えてるよね……。すごい。

芹澤 だって、すごい練習しなかった？

森崎 やったやった。

芹澤 放課後とかも居残りで。

森崎 そうそう！なのに男子は全然練習しなくてね〜。

鴨木 え、そうだったっけ？

工藤 ……何気にあの頃、男子と女子って対立してたよね？

森崎 してたしてた。

鴨木 そういうんじゃないかって、ほら、異性とか意識する年頃だから。

森崎 ふ〜ん。じゃあ、本当は好きだったからイジワルしてたんだ？

工藤 え……マジで？誰？誰？

鴨木 ……いや誰とかじゃなくて。

森崎 いーじゃん。10年前のことなんだからさ〜。白状しちゃいなよ。

工藤 やっぱ一番喧嘩してたのは倉本か。

倉本の名前を聞いて、全員ほんの少しだけ表情を固くする。

森崎 ……そういえば、倉本さんは？

鴨木 来るよ。さつき、ちよつと遅れるって（連絡があった）。湯山も一緒。

森崎 ……そっか。

全員どことなく落ち着かない様子を見せる。

鴨木 （何気ない風に）佐々木ってさ……卒業してから倉本に会った？

啓太 あ……病院には、何回か、お見舞いに行ったけど……。ほらっ、その後、市内の方に引っ越っちゃったから……。

鴨木 じゃ、まだ・・・(言葉に迷う) 大丈夫だった頃しか知らないんだ・・・。(皆が鴨木の方を見ているのに気づいて) いや、俺も・・・。  
森崎 私も・・・引越し前にちよつと会ったつきりかな。  
芹澤 なんか・・・距離が離れちゃうと・・・なかなか・・・ねえ？  
工藤 やつぱさ、あんなことになっちゃうと、会い辛いよね。

皆が齒切れの悪い言い方しかできないでいる中、ひとりだけストレートな工藤の言葉に、思わず全員沈黙する。

鴨木 ……あ、でも、湯山は倉本とよく会ってるらしいよ。今日も一緒に来るって。  
芹澤 そつか・・・。湯山さんも市内の中学行ったんだもんね。

森崎 でも意外。あの2人が仲良いなんて。だってさ・・・。(何かを言いかけて止める)  
鴨木 10年も経てば人間関係だって変わるんじゃないの？なんかほっとしたよ、それ聞いて。  
工藤 (何かを見つけて) あっ！

工藤は突然立ち上がると、壁際に向かおうとする。  
その動きで森崎が手に持ったドーナツを床に落とす。

森崎 ちよつと！何するの！

工藤 あ、悪い。

森崎 あゝあ、勿体ない。

工藤 いーじゃん。まだ食べれるよ。

森崎 嘘！無理だよそんなの。

工藤 ……じゃ、オレが食べるけど。

工藤、床に落ちたドーナツを口に放り込む。  
全員引く。

工藤 こういうの日本人は神経質過ぎるんだよ。全然平気だって。  
森崎 ……10年経っても変わらない奴がいたよ。

工藤は壁際に置いてある怪しげなオブジェを手に取る。

工藤 それよりさ、見て！これ、見覚えはない？

芹澤 え・・・そう言われると、なんか見たことあるような気が・・・。

工藤 絶対(見たこと)あるって。だってこれオレがつくったんだもん。

全員驚く。

鴨木 あく分かった！なんか、賞とったやつだ！

工藤 そうそう。記念に学校に飾ってくれて、卒業する時にお願いたんだよね。

鴨木 へえ・・・本当に10年間置いといてくれたんだ。

工藤 ・・・・なんかさあ、これって凄くない？卒業しても生徒の作品はちゃんと残して  
いてくれて・・・。オレ、ちよつと感動なんだけど。

芹澤 それ、学校なくなる時はどうなっちゃうんだろう。

鴨木 せっかくだから貰って帰れば？

工藤 いや・・・せっかく10年もこの部屋を守り続けてきたんだ。朝峰小とともに最期  
を迎えさせてやるよ。

啓太 ・・・・そういや、この部屋って全体的に昔と全然変わってないよね。

鴨木 確かに・・・並んでる本もほとんどそのまま残ってるような気がする。

芹澤 なんかこのまま「読書の時間」が始まっちゃうそうだよね。

突然チャイムが鳴る。

全員驚いて黙る。

足音が近づいてくる。

思わず全員入り口の方を向く。

若菜が部屋に入って来ようとして、

注目されていることに気がつき驚いて止まる。

お互い目が合ったまましばし沈黙。

若菜 あ・・・あの・・・お入りしてもよろしいでしょうか？

鴨木 ・・・・あ、済みません。どうぞ。

若菜 では、失礼致します。

若菜が部屋に入ってくる。

手にはピンク色の大きなバックを持ち、フリフリのついた少女っぽい服装をしてい  
る。

若菜 ああ〜っ！やはりそのようなところに！

若菜、部屋の隅に駆け寄る。

掃除道具らしきものが置いてある。

若菜 申し訳ございません。まだお掃除が終わってなかったのですが、汚れておりませ  
んでしたか？

芹澤 全然、綺麗でしたよ。大丈夫です。



若菜 あ、でも、床とかまだやってなかったのですが、埃とか残っておりませんでした？

全員、工藤を見る。

工藤は突然見られて驚くが、何のことか気づいていないようだ。

鴨木 あの・・・職員の方ですか？

若菜 ああっ！この度は、名乗りもせずに申し訳ありません。私、あの、職員というわけではないのですが、時々、掃除したりとか、鍵を閉めたりとか、そういうお手伝いをさせて頂いております。若菜と申します。

鴨木 バイト・・・ってことですか？

若菜 あっ、そうですね。そう言えばよかったですね。なにぶん慣れないもので・・・。分かりにくくて申し訳ありません。

鴨木 あ、いや、こちらこそ、なんだか済みません・・・。あ、僕らここの卒業生なんです。

若菜 ええ、分かります。明日の記念式のためにいらっしゃったんですね。お帰りなさいませ。(頭を下げる)

芹澤 あの・・・、この部屋ってもう使っていないんですか？

若菜 ええ、普段は締めちゃってます。市立図書館がなくなったのはご存知ですか？

芹澤 ええ・・・。

若菜 その時、あそこの子供用の本を丸ごと譲って頂いたんです。それで、新しい図書室を別につくって、こっちは閉じちゃったんです。

芹澤 それで・・・。

若菜 ？

芹澤 いえ、私たちがいた時と全然変わってないんでびっくりして。それでさっき、チャイムが鳴って足音がしたんで、思わず、先生が来たような気がしちゃって。

森崎 「本の時間」が始まる！って。(笑)

鴨木 そうそう！

若菜 ？

鴨木 ああ、僕らがいた頃「本の時間」っていうのがあったんです。

森崎 毎日昼休みの後の30分は、ここで本を読むんです。

若菜 へえ・・・素敵ですね。

鴨木 だから、昼休みもここで過ごしてることが多くて・・・なんていうか、溜まり場でしたね。それで、今日みんなが集まろうってなった時、せっかくだから図書室がいかなかった・・・。

若菜 うわあ〜っ。思い出の場所で仲間と再会だなんて素敵ですね！

鴨木 いや、そんな大げさなもんじゃ・・・。

若菜 いえいえ〜、凄いですよ。私の小学校なんて、ちっとも仲がよろしくなかったですから、もしそんな風に声を掛けても、きっと誰も来ないと思いますよ。皆さんが羨ましいです！

鴨木 はあ・・・。

若菜 そうでしたか……。本当はこの部屋、早く片付けろって怒られてるんです。(笑)  
本も、ちゃーんと選り分けて下の図書室に入れてあげないと可哀想だし、この変なの(工藤がつくったオブジェを手取る)も、さっさと処分しろって。でも決めました！私、これからも、皆さんのために、頑張ってお片づけサボっちゃいますね。  
(笑) 任しといてください！

森崎 あ、でもそれ(工藤のオブジェ)は、早く処分した方がいいですよ。  
鴨木 そうそう。それ、呪いがかかっているんですよ。

若菜 ええっー。そうなんですか？！(慌ててオブジェから手を離す) 止めてください……。私、そういうの本当に苦手です。

鴨木 僕らがいた頃は「ザビエルの呪い」って言われてました。

森崎 ええ、バカが伝わるんです。

若菜 だから、止めてくださいってばー！でも確かに、これ、何かヨカラヌものが出てるような気がしてたんですよ……。私、そういうの結構見える方なんで……。ほら、こうやると、何か感じませんか？

無然とした表情の工藤。

若菜は掌を工藤のオブジェにかざす。

鴨木と森崎もふざけて真似をする。

若菜は室内をぐるりと見回すように掌を回転し始める。

ふと、机の上のクリスピードーナツに目を留めて動きが止まる。

若菜 ……そちらにいらつしやるのは、もしかして……。クリスピードーナツだった  
りませんか？

鴨木 あ、すみません！こんなの図書室に持ち込んだじゃいけなかったですね。

若菜 ……私、去年、東京行った時に食べましたよ。

鴨木 あ、ご存知でしたか。

若菜 ……2時間くらい並びますよね。

鴨木 あ、最近はそのままではないですけど、でも、まだ結構待ちますね。

若菜 ……口当たりが全然違いますよね。

鴨木 そうですよね。これ食べたらミスドとか行けなくなりますよね。

若菜 ……。

鴨木 ……あの、よかったらおひとつどうですか？

若菜 あのっ、わたし、もしかして今、すごい要求したような感じじゃありませんでしたか？

鴨木 いえ、全然。そんなことないですから。

若菜 あ、でも、やはり、このような貴重なスイーツは、ぜひ、せっかく再会した同窓生の方々に召し上がっていただくのが、あの、スジではないかと。

鴨木 いや、沢山あるんで、気にせずどうぞ。

若菜 あ……。迷う。では、お言葉に甘えて。

若菜、バックの中から手作りっぽい布製の小物入れを取り出し、それにドーナツを入れようとする。

芹澤 あ、ティッシュでよければありますけど・・・？

若菜 あ、どうぞお構いなく。ちゃんと専用の袋を持っていますから。

若菜、ドーナツをバックに仕舞うと、掃除道具を片付け始める。

若菜 それでは、お邪魔虫はそろそろドロシします。

鴨木 ……あの、ここ、まだ居て大丈夫ですか？

若菜 ええ、6時くらいに鍵を締めに参加しますから、それまででしたら結構ですよ。窓だけは気をつけてくださいね・・・あら、私、小学生相手の癖が。

森崎 いえ、まだ小学生みたいなのがいますから、十分に気をつけさせます。

工藤 (ふざけて小学生風の言い方で) ハイ、窓から乗り出さないように気をつけます！ (窓から外を見て) おおっつ、朝峰の大自然が一望の元に！・・・あ、あれって新しい公会堂？やっぱ無駄にだけーな・・・へえつ、ここって、あんな町の方まで

見えたんだ。知らなかった・・・ああ、そうか。その旧校舎が無くなったからだ。

啓太、森崎、芹澤、そして鴨木が表情を曇らせる。

若菜 あら、皆さん、旧校舎をご存知なんですね。もう無いんですよ〜ごめんなさい、そつちを片付けるのは私のカンカツではないので、守りませんでした。(笑)

居心地悪そうに顔を見合わせる森崎、芹澤、鴨木。

鴨木、何かを言おうとするが何も言えない。

若菜 何年前になるんですかね〜。その旧校舎で事故があったんですよ。ご存知ですか？

鴨木 (皆の様子を気にしながら) ええ・・・まあ、何となく。

若菜 なんか、この生徒さんが、床を踏み外しちゃったみたいで、可哀想に、女の子がひとり大怪我しちゃったんですよ。それで、危ないからって、事故のすぐ後に立て壊しにしたんです。私も聞いただけなんですけどね。

鴨木 はあ・・・。

全員、何となく啓太の様子を気にしている。

若菜 まだ小学生だっというのに可哀想にねえ。今はその子たちどうしてるんでしょう、元気でいてくれると良いのですが…。

啓太 あの・・・。

突然、若菜のカバンの中から、携帯電話の着信メロディが流れる。

若菜は慌ててカバンの中から携帯を取り出す。  
本体はガラガラにデコレーションされており、  
長々と繋がられたストラップはカバンの中から出しきれない。

若菜 あ、はい・・・申し訳ありません。今、上の図書室ですのですぐ戻ります。

話しながら部屋の隅のほうに移動する若菜。

どこまで動いてもカバンの中からずるずるストラップの続きが出てきて、  
端が見えない。

話し終わって電話を切る。

若菜

すみません！私、そろそろオイトマしなければなりません。皆さんはぜひゆっくり、  
旧交を温めてください。それでは！ご機嫌よう！

若菜、部屋を出て行く。  
しばらく沈黙。

工藤

・・・「ご機嫌よう」って、実際に言う人、初めて見た。

鴨木

てゆうか、あの服装・・・いくつぐらいだろ。

森崎

年下だったりして。

鴨木

あくでも、バイトでしょ。結構あり得るんじゃない？

工藤

(キヤラ) 濃いな・・・。

鴨木

お前が言うな。

森崎

ザビエルの癖に。

鴨木

バカ。

森崎

死ぬ。

工藤

ちよつと。(若菜の物真似で)止めて頂けませんか？そのようにおっしゃるのは！

鴨木

違う違う。

森崎

もつと可愛かった。

鴨木

やり直し。

工藤、若菜の物真似を続ける。

思いつきり変なポーズを取ったところで、部屋に入ってきた湯山薫と目が合う。  
そのままのポーズやや沈黙。

工藤

・・・久しぶり。

湯山

変わらないですね。

倉本 あ、もう、みんないるの？

湯山に手を引かれて倉本章子も部屋に入ってくる。

倉本の両目は、固く閉ざされたままであった。

失明しているのだ。

誰も口を開こうとしない。

重苦しい沈黙。

鴨木 (思い切って)・・・久しぶり。

倉本 本当・・・卒業以来だね。もう全員揃ってるの？

鴨木 あ・・・うん、これで皆揃った。

湯山 ごめんなさい。こっちに来るの久しぶりだったもんで、道に迷っちゃったんです。

工藤 ・・・・いや、オレたちも寄り道してて、今来たところだから。

倉本 ここ、あの図書室なんだ。

工藤 そうそう、懐かしくない？

倉本 う〜ん、(見回すような仕草をして) ちょっと分からない・・・かな？

沈黙。

工藤 (焦って)あ・・・あの、匂い、とか。本の匂いとか古い木の匂いとかは？

倉本 ・・・・なんか、甘い匂いはするけど。

鴨木 あ。

全員、慌てて机の上のクリスピードーナッツを遠ざけようとする。

工藤は、ドーナツの匂いを飛ばそうと服で扇いでみるが、周りに見咎められて止める。

再び沈黙。

森崎 (思い切って)倉本さん・・・なんか、雰囲気変わったね。

倉本 ・・・・ごめんなさい。今のは、えーと、誰？

沈黙。

森崎 あっ・・・。ごめんなさい。えーと・・・森崎です、森崎さおり。ひさりぶりです。

倉本 ひさしぶり。ごめんね、たぶんそうだと思ったんだけど、ちょっと迷っちゃって。

工藤 ……あ、オレ、工藤俊平！あの…ザビエルです。

倉本 ザビエル！うわあく懐かしい…元気だった？

工藤 もちろん、むちやくちや元気。

湯山 工藤くんはすっごく大人っぽくなってるよ。髭とか生やしてるし。

倉本 ええ、嘘っ。あの工藤くんが？それじゃ、本当にザビエルだ。

工藤 あ…いや、あんな変な髭じゃないけど。

湯山 どうせなら頭も河童みたいにしちゃえばいいのに。

倉本 本当に。(笑)

工藤 うわ…倉本の頭の中でどんなイメージになってんのか、すっごい不安なんだけど…。

芹澤 (思い切って) あ、芹澤涼です、ひさしぶり。

倉本 涼ちゃんだ！ひさしぶり。

湯山 芹澤さんも大人っぽい感じ。なんか落ち着いてるし、お姉さんみたい。

芹澤 ええっ、そんなことないよ。全然、何にもできないし…まだ子供だよ。

倉本 (笑)

湯山 あと、佐々木啓太くん。

啓太 ……佐々木…啓太です。

倉本 佐々木くんも、ひさしぶり。本当に全員いるんだね。

湯山 佐々木くんは、すっごく格好よくなってる。

森崎 あ、そうでしょ？なんかねえ…マツジュンにそっくりなの！

倉本 マツジュン…？

森崎 そう、嵐の。

倉本 ……ごめんなさい。私、SMAPまでしか見たことないんだ。

沈黙

森崎 ……あ…えっと…ごめんなさい。

湯山 アイドルの顔が分からないなんて、オジさんみたいだね。

倉本 本当だ。(笑)

倉本と湯山が2人だけで盛り上がっている。

後の皆は一緒に笑っていいものか分らず顔を見合わせている。

湯山 あの、私たちもドーナツもらっていいですか？

鴨木 あ、もちろん。

鴨木、慌ててドーナツを倉本と湯山に渡す。

倉本 あのさ、私、皆が今どうしているとか、全然知らないんだけど。

鴨木 あ、ごめん。そうだね…。じゃ、全員揃ったし、近況報告でもしようか。

倉本 賛成。

鴨木 じゃ、言いだしっぺの僕から。(立ち上がる)・・・えーと、鴨木大輔です。こないだまで東京の大学に通ってたんですが、この3月で卒業して、来月から新聞記者として働きます。

一同、なんとなく拍手をする。

森崎 あ、私？えーと、森崎さおりです。一年浪人しちゃったんでまだ学生です。今は就職活動で苦戦中です。

拍手。

工藤 工藤俊平<sup>22</sup>歳、絶賛自分探し中です！(全然受けないので若干怯む)オレも一浪して大学入ったんですけど、旅に目覚めちゃって、ぶっちゃけ学校には全然行っちゃいません！最近では、去年の秋から今年にかけて、マレー半島からインド辺りまでをウロウロしてました。

倉本 へえ・・・面白そう。ウロウロってどういうことするの？

工藤 何かをするっつーか、まずは世界を見たいっていうのがあるんで、ま、安宿を泊まり歩いていろんな国の人に会ったりとか？やっぱあっちは日本みたいにあくせくしてないんで、大げさだけど、人間の本来あるべきリズムに戻れるっていうか、まあ、かなり、人生観変わっちゃうよね。

倉本 へえ。

工藤 そんなで、たまくに普通の観光地的なところも覗いてみたり？そうそう、こないだタイのシミラン諸島ってところに行ったんだけど、海の色とか、マジでビビるから。なんか気候の関係で年の半分くらいは人が入れないらしいんだけど、そのお蔭で完璧な自然が残ってるの。もうあれ見ちゃったら、日本の海なんて海と認めらんないから。もうね、あの海の美しさを知らない人間は、人生半分くらい損してんじゃないの？って感じ？

全員凍りつくが、工藤は話に夢中で気がつかない。

倉本 そっか・・・。じゃ、私は、人生の楽しみの半分はもう味わえないんだね。残念だな。

工藤 あ、いや、だから・・・今のはそういう意味じゃなくって・・・。

倉本 ・・・・じゃあどういう意味？

倉本は俯いて目元に手を当てる。

工藤、助けを求めるように皆の方を向くが、全員黙ったままおろおろしている。

工藤 つまり・・・何て言うか・・・もっと精神的な意味でっていうか・・・、そうそう、例えば、心の目を通じて、本質的な部分で感じるっていうこともあるわけじゃん？ その・・・、逆にさ、普通に肉眼で見ている人が、かえって本当の物が見えなくなってしまうっていうこと。つまり・・・。

倉本、突然大声で笑い出す。

倉本 あははははは。嘘嘘。ごめんね、あんまり真剣だからちよつとからかっちゃった・・・。あゝ、お腹が痛い・・・。「心の目」って。(笑)

全員、啞然とする。

倉本 いいっていいって。悪気があつて言ったわけじゃないのは分かっているから。それから皆も、さつきから気を遣い過ぎだよ。そんな、気を遣われると逆に居心地悪いんだけど。

鴨木・・・あ、いや、別に、そんなつもりじゃ・・・。

倉本 分かるって。さつきから、目の話題に触れないように触れないようにしてるでしょ・・・あのさ、私も目が見えなくなつて10年近く経つんだよ。もう、それが普通の状態なわけ。だから、そこに触れないのはかえって不自然だつて。なんだ・・・。

工藤が安堵して一気に気を抜く。

倉本 ははは。ザビエルは正直だね。ほら、いいから何でも聞いてよ。遠慮しないで。皆、お互いに顔を見合わせる。

工藤 あのさ・・・もう、全然、見えないわけ？

倉本 そうだね・・・明るいところだと、何となく影みたいに見える時があるけど、基本的には。

沈黙。

倉本 他には？

沈黙。

倉本 ほら、何か喋つてよ。こっちは見えないんだからさ、黙られるとどうしていいかわからない。

工藤 え。じゃあ・・・。



倉本 お前はもういいよ。  
工藤 ええっつ。

情けなそうな工藤の言葉に全員思わず笑う。  
少し笑ったところでなんとなく雰囲気是和らぐ。

倉本 じゃ、さっきの続きやろうか？

芹澤 ……あ、じゃあ、私が。芹澤涼です。私は、朝峰工業出てから1年だけ専門行つて、今は、市役所で働いています。

倉本 え、じゃあ、朝峰小無くしちゃう張本人じゃん。

芹澤 ええっつ。そんな、だって、私はただの下働きで……。

倉本 はは。分かってるって。相変わらずだね。

芹澤 ……。(顔を赤らめる。)

鴨木 ま、犯人は市役所っていうより中国だろうね。マルキタ電子とかカワモト精工とか、朝峰を支えてた会社がどんどん中国に工場移しちゃうからさ……。

工藤 お、さすが、新聞記者！

森崎 ねえねえ、そういえばどの新聞なの？まだ聞いてなかったよね？

鴨木 ああ、一応……朝日だけ。

森崎 えっ何、すごい。エリートじゃん！。分かった！じゃさ、私、これから朝日新聞とるよ。ちゃんと毎日、鴨木くんの記事確認するから。

芹澤 私も。

鴨木 ……別に名前入ってる訳じゃないから分かんないって。それに、最初はどっかの地方局で警察回りだから、書いたとしてもきつとどっかの地方面だよ。

芹澤 どこに行くかは分からないの？

鴨木 ……うん。入ってしばらく研修があつて、その最後に配属が決まるんだって。出身とか一応、考慮してもらえるみたいだから、もしかしたらこっち戻ってくるかもしれないけど。

森崎 えっ嘘っつ、絶対戻って来てよ！

鴨木 うんまあ、確かに、こつちに戻って、できれば朝峰のこととか書いてみたいんだよね……。やっぱ、伝えるっていう仕事を選んだ以上、大事な故郷が寂れていくのは見過ごせないっていうか……。あ、ごめん、ちょっとクサかった？

森崎 そんなことないよ。(冗談めかして) 格好いい。

倉本 うん、すっごく鴨木くんらしいと思うよ。頑張つて。

鴨木 ……でもまあ、偉そうなこと言ったけど、所詮はサラリーマンだから、行けつて言われたところに行くだけなんだけど……。

芹澤 でも、みんなが入りたくても入れる会社じゃないんでしょ？

森崎 そうだよ。私なんてもう12連敗中だよ！

芹澤 そっか、大変だね。

森崎 そうだよおっ！今年売り手市場だとかいって、どこでそんなに売れてんだっつーの。完璧に売れ残り中なんだけど。

鴨木 どういう業界を回ってんの？

森崎 だから〜っ、そういうギョーカイとか言える恵まれた身分じゃないんだって！もう手当たり次第受けて全部撃沈、みたいな。絶対、合コンの成功率の方が高いんだけど！

鴨木 あのさ、そういう「どこでもいい」「みたいなやり方が駄目だと思うよ。お前だって、「女なら誰でもいい」ってやつと付き合いたくねーだろ？まずさ、自分が何をやりたいのかってことを・・・。

森崎 ……いいの、私はそーいうの。誰も相手にしてくれない子にはそーいう相手しか来ないんだよ。

鴨木 ……。

芹澤 ……私も、専門出て就職活動した時は、何ヶ月も決まらなくて苦労したよ。大丈夫、さおりちゃんはしっかりしてるし、ちゃんといい所見つけれられるから。

森崎 (芹澤の手を取る) ありがと〜。やっぱ、私のこと分かってくれるのは涼ちゃんだけだよ……。

工藤 もし駄目だったら、海外とか行っちゃえばいいよ。バイトでちよつと金貯めれば、タイとか余裕で半年くらいは暮らせるから。日本で窮屈にしてるよりよっぽどいいよ、マジで。

全員、工藤の発言を無視する。

鴨木 そういや、佐々木は？今、何やってんの。

啓太 ……別に。普通にバイト。

森崎 あ……あれだ、TSUTAYAにいますよ！お姉ちゃんが言ってたよ。

鴨木 (少し小馬鹿にしたように) へえ〜。そうなんだ……意外。

芹澤 (慌てて) あれだよ、佐々木くんは、働いてたところが合併されちゃって、それで……別に関係ないよ。自分から辞めたんだし。それに、元々やりたかった仕事って訳でも……。

森崎 私、啓くんは絶対、野球やるんだって思ってたんだけどな。

啓太 そんなの、簡単に続けられるもんじゃないから。

工藤 いいじゃん、バイトで。そうやって、いろいろ経験しながら自分のやりたいこと見つけていけばいいんじゃない？

啓太 そういうんじゃないし。

全員 ……。

倉本 (沈黙を遮るように) じゃ、次は私かな……。倉本章子です。今は、県庁の福祉課で働いています。会議の資料を準備したり、翻訳したり、議事録のテーパー起こしをしたり、みたいな毎日です。

森崎 ええ〜っ凄〜い。もしかして、この中で一番ちゃんと働いてるんじゃないの？やっぱ、倉本さんは格好いいわ……。

芹澤 私もたまに議事録書けとか言われるんだけど、すぐ時間が掛かっちゃって、しかも後でほとんど直されちゃったりとかして、全然できないんだよね……。

森崎 分かる分かる。私なんて履歴書の自己アピール書くだけで3時間悩むから。つーか、100文字もアピールすることなんかないっつーの。そんなに長所並べられるなんて、どんだけ嫌味な奴なんだよ！って感じ。

鴨木 おいおい・・・今、倉本の話だろ。

森崎 だから、倉本さんは凄いつてことだよ。やつぱ目が見えるかどうかなんて人生には関係ないね！どんな状況でもデキる人は活躍するってことだよ。

鴨木、啓太、芹澤は森崎の言葉に一瞬ドキツとするも、

倉本含め他のメンバーがあまり気にしていないように

見えるのに安心して口をつぐむ。

倉本 いやもう、私のことはいいから・・・。それじゃ、最後は薫ちゃんお願い。

湯山 ……湯山薫です。市内の建築関係の会社で営業事務の仕事をしています。

鴨木 ……湯山と倉本は、結構会ってるわけ？

湯山 そうですね、朝峰小から市内に行ったの私たちだけだったから・・・。学校はずつと違ったんですが、時々一緒に出掛けたりしました。

工藤 湯山くっ。なんでさつきからオレらには敬語なの？

湯山 ……あ。久しぶりなので、どういう喋り方してたか思い出せなくて・・・。ごめんなさい。

工藤 いや別に、謝ることじゃないけどさ。せっかく同級生なんだからタメ口でいいじゃん。

倉本 そうだよ。相手はザビエルだよ。

湯山 ……あ、そうだよ。ごめんなさい。

全員笑う。

鴨木 あのさ、ちょっと思ったんだけど・・・。こうやってまた全員集まれたのも何かの縁だからさ、これからも定期的に集まるようにしない？

森崎 賛成くっ！やろーやろー。

芹澤 そうだよ、たった7人の同級生なんでもん、これからも仲良くしていきたいよね。

鴨木 そうそう、学校がなくなっちゃうからこそ、こういう絆は大切に残しておかないといけないと思ってさ。

工藤 じゃさ、それを記事にしてよ。全国にアピールしようぜ。

鴨木 ああ、書く書く。

倉本 ははっ。いいね。過疎で廃校になっても、同級生の友情は続いているのです、って？

森崎 朝日新聞っぽいっ！

工藤 でもそれを鴨木が書くんだろ、それってギゾウじゃん！

鴨木 いや、別に嘘を書くわけじゃないから。

森崎 じゃあジサクジエンだ！

一同、盛り上がる。

啓太 あのもの・前に、話したいことがあるんだけど。

鴨木 何？今週のTSUTAYAのお奨めランキング？

一同、笑う。

森崎 はーい！私、早く「花より男子」レンタルして欲しいんですけど！

工藤 マジで？超詰まんなかったんだけど。

森崎 えー嘘っつ。超、感動するよー？

啓太 ……あの！事故のことなんだけど。

一同、沈黙する。

啓太 ……あの頃は小さかったし、オレ自身、何をどう考えていいかわからなかったから……っていうか、正直言うと、怖くて……なんとなくウヤムヤなまま今まできちゃったけど、やっぱ、はっきりはじめをつけておかないと思うんだ……。

鴨木 だからさー。せつかく皆でこれからの話をしようっていう時に、なんで昔の話をだしてくるの。

森崎 そうだよ、後ろばかり見てないでさ、もっと前向きに行こうよ。

啓太 いや、だから、そういう意味じゃなくて。

若菜、部屋に顔を出す。

若菜 あのもの・お話もタケナワなところすいみません。

？

湯山 (倉本と湯山に向かって) あ、学校の人……。

若菜 (倉本と湯山に気づいて) 若菜と申します。大変お邪魔します。

こんにちは。

工藤 あのもの・ワカナさんって、苗字は何ておっしゃるんですか？

若菜 あ、若菜が苗字なんです。若菜良子と申します。

工藤 あ、そうなんですか。てっきり名前がワカナなんだと。

若菜 そうなんですよ。よく間違えられるんですね。でも、いきなり初対面で名前の方を名乗ったりはしませんよ。

工藤 いや。名前で名乗っても許されるキャラだと思いますよ……。

倉本 なに、ザビエル、こんな時に口説いてるの？

工藤 ちげーよ。

若菜 あのもの・、大変申し訳ありません。お気持ちは嬉しいのですが、私、夫も子供も

いるものですから。

全員驚く。

工藤 え・・・いや、そういうんじゃないので、全然、気にしないでください。

鴨木 残念だったなく。ま、今日はとことん飲んでいいから。

森崎 大丈夫。きつといつかいい人が現れるよ。

工藤 だから違うから！

森崎 照れちゃって。

若菜 皆さんすっかり盛り上がっていらっしやいますね・・・。もう、「本の時間」はさ  
れたのですか？

倉本 「本の時間」！懐かしいね。

鴨木 (若菜に向かって) あ・・・。いや、別に、今日やろうってわけじゃないですけど  
ね。

倉本 いいじゃん。面白そうじゃん。やろうよ。

全員、驚いて倉本の方を向く。

倉本 私、せっかく懐かしい場所に來たのに何にも見れないからさ、代わりに皆で朗読し  
てよ、昔みたいに。

若菜は倉本の目が見えないことに初めて気がつく。

森崎 ・・・・そうだね。せっかく図書室に集まったんだし。やろうやろう。

芹澤 うわっつ。なんか、ワクワクしてきた。

工藤 よしし、じゃ、どれにしようか。(本棚を探し始める)

倉本 あのさ・・・。「フェルマーものがたり」って覚えてない？

工藤 あれ、なんだっけ、なんか聞き覚えあるけど。

芹澤 あれじゃない？主人公が佐々木君にそっくりなやつ。

森崎 あくなんかあったね、そういうの。

倉本 まだあるかな。

工藤 ちよつと待って、今、探すから。

工藤、芹澤、森崎は一緒になって本棚を探し始める。

若菜 あっ！そうでした。私、戻ってきた目的を忘れるところでした。(手に持っていた  
箱を鴨木に渡す) これ、先ほどのお礼です。

鴨木 え、いや、そんなお礼だなんて。却って申し訳ないです。

若菜 いえいえ。あの幻の銘菓をこの朝峰で食することができたのは、皆さんのお蔭です。  
ぜひ、お礼させてください。

鴨木が箱を開ける。

若菜 すみません。初めてつくったんで、上手くできたかどうか分からないんですけど……。

箱の中にはなぜか縫いぐるみが入っている。戸惑う鴨木。

鴨木 あの……これを、つくったんですか？

芹澤が本棚から一冊の本を取り出す。

芹澤 あっ！ねえ、これじゃない？！

鴨木、湯山、工藤が芹澤の周りに集まり本を覗き込む。

工藤 あゝこれこれ、なんか覚えてるわ。

森崎と芹澤が、本の挿絵と啓太を見比べる。

森崎 これが小学校の時の佐々木くん……に似てる？

芹澤 微妙〜っ。

工藤 ちよつと、貸して貸して。

工藤、森崎から本を取り上げる。

森崎は少しむっとしたような表情を見せる。

工藤 う〜ん。そう言われれば、確かに昔はこんな顔してた気がするけど……。っていうかこれさ、(本を広げて皆に見せる)主人公の名前のとこ、全部「ささき」って落書きしてるんだけど、これ、絶対オレ。

お前なあ……。

森崎 (本を見て) 本当だ。(笑)でもさ、これ書いてんの最初の方だけじゃん。途中で飽きてんの、分かりやすっ！

工藤 なんか、この部屋の至るところにオレが居たっていう証が残ってるよな。  
森崎 だからこの部屋閉じてたんだよ、後輩に悪影響を及ぼさないように。

全員笑う。

芹澤 ねえねえ、早く読もうよ。

鴨木 じゃさ、昔みたいにいち段落ずつ回し読みする？

倉本 あ、ごめん。ちよつとその前にトイレ行ってきたいんだけど。

工藤 あ、オレも。(倉本に付き添おうとした湯山を遮って) 倉本もオレが連れてってやるよ。

鴨木 ザビエル、お前、トイレの中まで付き添うつもりじゃないだろうな。  
森崎 えっ、嘘。変態!

芹澤 最低。

工藤 だから！ちよつと待てよ!

若菜 あの一よろしければ私がお付き添い致しますけど?

湯山 いえ、私が行くので……。

若菜 (有無を言わせない調子で) ぜひ！お手伝いさせてください!

倉本 ……じゃあ、お願いします。

若菜 (張り切って) では！お手をお借りしますね。

若菜が倉本の手を取って部屋を出て行く。

次いで工藤も部屋を出る。

森崎 本当に大変だよね……。トイレもひとりで行けないなんて。

芹澤 あのさ、目の見えない人がよく杖を持って歩いてるじゃん。ああいうの使えば大丈夫なんじゃないかな?

森崎 でも初めての場所とかはやっぱ道も分からないじゃん。やっぱ誰かは付いてないと駄目なんじゃないの?ね、(湯山に) どうなの?

鴨木 あのさ！そうやって、本人の居ないところで噂するのは止めろよ。

森崎 え、ちよつと待って。別に悪口とか言ってる訳じゃないんだけど。

鴨木 森崎にそのつもりがなくてもさ。やっぱそういうの良くないって。

森崎 (あてつけるように) はいはーい。分かりました。(不満そうな顔で黙る)

湯山 ……あのさ、皆、ちよつと聞いて欲しいことがあるんだけど。

全員、意外な顔で湯山を見る。

湯山は机に置かれた本を手にとってページをめくる。

湯山 この本ってさ、確か、主人公が魔女の目を潰すっていうシーンがあるんだよね……。

鴨木 マジで?

湯山 (ページをめくる手を止める) ほらっ、たぶんここだ。

鴨木 (開かれたページを覗き込む) ……うわっ、これはちよつとヤバいわ。石を魔女の目に投げつけるだって……。っーか何これ、『罰として一生暗闇の中で過ごせばいい』だって。ちよつとこれはシヤレにゃなんないわ。

湯山 ……さすがにこれを読むのはまずいと思うんだけど。

鴨木 確かに……。 (しばらく本に目を通すと、一部のページに折り目をつける) じゃ

あさ、この、ページ折つてるところは読み飛ばすってことで。(後ろのページをめくりながら) たぶん、飛ばしても話につながる……。はず。

芹澤 よく覚えてたよね……。ありがとう。

湯山 短大の時、子供の世話をするボランティアをやってて……。その時、この本を読んだんだよね。

森崎 お蔭で先に気づいて良かったよ。偉いっ！

啓太 ……あのさ！やっぱ、そういうの良くないと思うんだけど。

全員 ？

啓太 いや、だから……。やっぱ、倉本が聞きたいって言ったんだから、ちゃんとそのまま全部読んであげるべきだと思うんだよね。

鴨木 え？ちよ、ちよっと意味分らないんだけど。じゃ佐々木は、わざわざ倉本を傷つけるようなことを言えっというの？

啓太 そういう訳じゃないけど……。事故のこととか目のことを、これ以上、誤魔化したりしたくないんだ。

鴨木 はあ？何それ。だからって目が潰れる話をこの場でするか？あくじゃあさ、湯山。お前どう思う？お前ずっと倉本と一緒にいるんだろ？そんな話して倉本が喜ぶと思うか？

湯山 ……さつき倉本さんは受け入れたなんて言ってたけど、たぶんきつと今でも目のことは気にしてると思う。

鴨木 ほら！

啓太 だからって、お互いに言えないことを抱えたまま、上辺だけで仲良くしたって、そんなの嘘じゃん。

鴨木 だからさ、それが意味分かんないんだって！というか、さつきも事故の話しようとしてたけどさ。えっ何、お前はどうしたいわけ？

啓太 だから、あの事故のことをちゃんと話し合っ……。

鴨木 だからさ！それはオレら関係ないじゃん！やったのはお前なんだから！

沈黙。

芹澤 ……ちよっと待って。なんでそういう言い方するの？

森崎 そうだよ……。あの時、旧校舎に行ったのはクラス全員なんだから。

鴨木 でもケガさせたのはこいつじゃん！……あー分かったよ。要するにお前は倉本に謝りたいんだろ？自分のせいで目が見えなくなったのに、ずっと会いにも言っていないんだもな。そりゃ、ケジメつけたいよ。でもさ！オレらまで巻き込むなよ！

芹澤 信じられない、なんでそんなこと言うの？

森崎 そうだよ！同級生なんだから仲良くとか、さつき自分で言ってたくせに。

鴨木 ちよっと待てよ、なんでそうなるの？オレは皆が仲良くこの場を過ごせるように言ってるんだろ？

芹澤 だからって、そんな言い方しなくていいじゃん。

鴨木 ああーっ！だから！そういうレベルの話してるんじゃないんだって！ちよっと黙ってるよ！

森崎 なによそれ！最低！



部屋の外から若菜、工藤の声が聞こえてくる。  
トイレに行っていたメンバーが戻ってきているようだ。

鴨木 とにかく！折ってるページは読まないってことで、いいな！  
知らない。私、あんたに命令される覚えはないから。

沈黙の中、倉本、工藤、若菜が部屋に入ってくる。  
部屋に残っていたメンバーとは対照的に、盛り上がっている3人。

若菜 それでは、私はそろそろ失礼します。

工藤 ええっ、せっかくだから参加していきませんか？

若菜 お気持ちは嬉しいのですが、仕事が残っているものですから。  
倉本 ほら、ザビエル諦めろ。未練がましいぞ。

工藤 だからそういうんじゃないって！

倉本は笑うが他のメンバーは黙ったまま。

若菜 それではごゆっくり。

若菜が部屋を出る。

鴨木 工藤、ちよつと。(工藤を手招きする)

工藤 ……何？

鴨木 (苛々しながら) いいから！  
工藤 なんだよ、やだよ。

鴨木は工藤に本を読み飛ばすことを伝えようとするが、  
工藤はふざけて話を聞こうとしない。  
苛々する鴨木。

倉本 ごめん、お待たせ。じゃ、始めようか。

鴨木 あ……うん。

工藤 (本を持って) じゃ、オレから。

鴨木 ……あのさ、今更だけど、別の本にしない？

工藤 え、なんで、今オレすげーやる気だったんだけど。

鴨木 いや、あの……さつき話してて、「少年探偵団」のシリーズとかも懐かしいなあ  
と思っ……

湯山 私も……。「少年探偵団」の方が聞きたいかな。

工藤 あ……そうだね。オレもそっちのがいいかも。

倉本 そう……。でもごめんね、私、「フェルマー物語」が聞きたいの。

はつきりと言い切る倉本に誰も反対できない。  
倉本の態度に何かを感じる鴨木、啓太、湯山。

工藤 ま、いいよ。じゃあ「ササキものがたり」でいくか。(笑)

鴨木、啓太、湯山はそれぞれ倉本の様子を伺うが、  
倉本はこれまでと変わらず、黙って聞いているだけだ。

工藤が本の朗読を始める。

工藤 「むかし むかし ひがしのはての そのまたさきに たいようのひかりに み

ちあふれた へいわなくなにが ありました」

倉本 うわー、なんかこの雰囲気ワクワクするね。

工藤 「あるひ このくにの おうさまと おきさきさまのあいだに たまのような  
かわいあかんぼうが うまれました。 おおさまは おおよろこびして いいま  
した 『げんきで かしこそうな おとこのこだ。 なまえを ササキと なづけ  
よう。 きつと このくにをせおつたつ りっぱな おうじに なるだろう』  
ちよつと、真面目に読みなよ。

工藤 仕方ないだろ、ちゃんとササキって書いてあるんだから。(笑)・・・はいっ、次次！

工藤が湯山に本を渡す。

湯山

(表現力豊かに感情を込めて読む)「ところが おおきくなった おうじは とん  
でもない いたざらこぞう。 おしろのなかは まいにち おうじのいたざらで  
おおそうどうです。』うわっ ひきだしの なかから かえるが できた!』た  
いへんだ たいせつなかびんが わられてるぞ!』

湯山の朗読の上手さに全員啞然とする。

工藤 なんだよ・・・。めちやくちやうめーじゃん。

芹澤 びつくりした・・・。湯山さん凄いです!

湯山 あ・・・いや、私、前に、ボランテアで子供に本を読んだから。

工藤 いいねえ。感じが出てきた。みんな、これに続け。

工藤が本を芹澤に渡す。

芹澤

(かなり棒読みでつかえながら)「あるひ フェルマーおうじは おしろの にわ  
の かたすみに ちいさなほこらが まつられていることに きづきました。』あ  
のなかには なにがはいって いるんだろう。 きつと すてきな たからものが

あるに ちがいない。』  
工藤 ほら、駄目駄目。湯山を見習えよ。  
芹澤 えくっ、無理だよ。

工藤が本を啓太に渡す。  
工藤を除く全員が啓太を見つめる。

啓太 「フェルマーおうじは ほこらを のぞいて ちいさな いしを みつけました。  
『なんて きれいな いしだろう。 ぼくの たからものに してやろう』フェル  
マーは いしを とうとうと てを のばしましたが たかさが すこし たりま  
せん。」

工藤が本を回そうと手を出すが、啓太はかまわず続きを読みはじめる。

啓太 『ちくしょう あと すこしなのに』フェルマーおうじは もういちど ぐいと  
てを のばしました。」

鴨木 おい、そろそろ代われよ！

啓太 「すると だいがが ぐらりと ゆれ いしは ゆかに おちて こなごなに  
なって しまいました」

鴨木 佐々木！

鴨木は啓太から本を取り上げようとするが、啓太は本から手を離さない。  
啓太は黙っている。  
しばらく沈黙。

倉本 どうしたの？早く続けてよ。  
鴨木 ああ、ごめん……。

啓太はまだ本から手放さないが、読もうとはせず押し黙ったまま。  
鴨木は戸惑っている。

倉本 ……ほら、その後は王子をさらに悪い魔女がやってくるんでしょ？見たものを  
すべて石に変える恐ろしい化け物が。

全員驚いて倉本を見る。

鴨木 倉本……。

倉本 王子が石を投げつけて魔女の目を潰しちゃうんでしょ？それで、魔女は一生、闇の  
世界を生きていく……。うん、全部覚えてんだ、私。  
……。

倉本 10年前、目が見えなくなるって言われたとき、私、真っ先にこの本を思い出しだの。ああ、私もあの魔女と同じ運命を辿るんだなあ。そう考えてたらさ、もう毎晩、王子に石を投げつけられる夢を見るようになったら、皆は忘れてたみたいだけど、私は小学校の時から、この本のことずっと忘れたことなかったんだよね。

全員 ……。

倉本 ごめんね、本当はこんなことするつもりはなかったんだけど……。本当に皆、何にもなかったようにしてるのがさ、なんか納得できなくて。

啓太 倉本……さん……本当に……。申し訳ありませんでした！あの、どんなに謝っても、謝りきれものじゃないっていうのは分かってるんだけど……。

倉本 そうだね。

啓太 ……あ……え……。その、本当、何て言えば良いのか……。でも、決して、なかったことにしようなんて、思ってたわけじゃ……。オレも10年間、あの事故のことは忘れたことないし……。

芹澤 あの、本当に、佐々木くんはずっと悩んで……。

倉本 へえ……。そう。で、10年間忘れずにいて、それで何かいいことあったの？だいたい、10年ぶりに会って、ずっと考えてたって言われてもね……。

啓太 ……それは……。あの、本当にズルいと思うんだけど、会うのが怖かったっていうか、本当、何て謝ればいいのか分からなくて……。それに、倉本はオレに会いたくないじゃないかとか……。全部、言い訳なんだけど。

倉本 結局、全部自分のことじゃん。ずっと言えなかったことが言えてよかったね、満足？気が済んだ？

啓太 ……だから……。オレは……。ごめん、本当、分からないんだ。こんなことを倉本に聞くのはおかしいって分かってるんだけど……。なあ、オレはどうすればいいの？どうすれば罪を償えるの？本当、分からないんだけど……。

倉本 ……。

倉本 ……いいわ。どうすればいいか教えてあげる。私の目が見えるようにして。私の10年を返して。私の人生を返して。それ以外の償いなんてないから。

啓太 ……。

倉本 できないんだったら、せめて、自分の目も潰してさ、私と同じ苦しみを味わってよ。できないんでしょ。だって、だったら償うとか偉そうなこと言うなよ！

啓太 ……。

倉本 ああ……。ごめん、さっき私ウソついた。私、全然、目が見えないこと受け入れてないわ……。だって、おかしいじゃん。なんで私だけこんな人生送らなきゃいけないの？仕事が出来て格好いい？目が見えなくても、出来る人は関係ない？そんなわけないじゃん！目が見えたら、県庁なんかで働いてないよ！世界中旅して……。大企業入って……。この中の誰より活躍してるって！何？TSUTAYAでバイトって、

そんな人生送るために私の一生を台無しにしたの？だから変わってよ！

湯山 止めて！お願い、もう、止めて！

倉本 邪魔しないで、言わせてよ。あんたが一番よく知ってるでしょ。私が10年間どんな思いをしてきたか。

湯山 違うの、そうじゃないの！……ごめんなさい！私なの！章子ちゃんの目を見えなくしたのは……本当は私なの！

倉本 な……ちよつと、何言ってるの。

湯山 今までずっと黙っててごめんなさい。あの時……事故の時、章子ちゃんの顔に当たった破片は……私が……落とされたものなの。

騒然となる一同。

湯山 あの時、階段で……本当は、ちよつと驚かすだけのつもりだったの。手摺の板が外れてたから……。暗かったし、急に足元に落とせば吃驚すると思って……。本当に……ごめんなさい。

啓太 ……いや、違うよ。やっぱ原因はオレだよ。だってオレ、自分が崩した床板が倉本に当たると見たし……。

倉本 ……そうだよ。すごい勢いで落ちてきたし、それは薫が落としたやつじゃ……。

倉本が湯山の方に近付き触れようとするが、湯山は手を払う。  
バランスを崩して倒れこむ倉本。  
誰も手を出せない。

湯山 ……でも、私、本当に……自分が投げた板が、章子ちゃんの顔に……ごめんなさい……。

倉本は自分でゆっくりと立ち上がる。

その間、何もできずただ見つめているだけの一同。

工藤 ……湯山さ、お前、本当に、驚かせるために板を落としたのか？

森崎 ちよつと、あんた、こんな時に何言ってるの？

工藤 湯山、どうなんだよ。本当に足元に落とすつもりだったのか？答えてくれよ。

鴨木 おい、止める。今、関係ないだろ、そんなこと。

工藤 本当に関係ないのか？どうなんだ、湯山？

湯山 ……ふざけて……驚かせてやろうと思って……。

工藤 最初っから、当てるつもりだったんじゃないのか？

鴨木 何言ってるんだ、そんなこと……。

工藤 そうか？みんなもおかしいと思ってんじゃないのか？なんでこいつらが今、仲良くなってるんだよ。何で変わっちゃったんだよ。皆も吃驚したじゃん。だって、小学校の時のこいつらはふざけて脅かし合うような仲じゃなかったろ？

森崎 止めてよ、そんな言い方。

工藤 言い方って何だよ。じゃ、もつとはつきり言おうか？小学校の時、倉本はずっと湯

山を苛めてただろ！

沈黙

工藤 ……なんだよ、こっちもなかったことにするのか？湯山の給食をチョークまみれにしてたのは誰だよ。上履きをズタズタに切り裂いたのは誰だよ。……ほら、何で皆、黙ってんだよ。

芹澤 ……お願い、止めて。なんで今、そんなこと言うの？

工藤 今だからだよ！な、湯山どうなんだよ。本当は……倉本に仕返ししてやるつもりだったんじゃないのか？

湯山 ……私は……ただ、ふざけて……。

工藤 いいから言えよ！ふざけて、吃驚させて、笑い合えるような仲だったのか？そんなわけないだろ？なあ……お前、なんで卒業してからも倉本に会ってたんだよ。一番会いたくない相手だったろ？ケガさせて申し訳なかったからか？それとも、仕返しで傷ついた無様な姿を近くで見て、笑ってやりたかったのか？

鴨木 おい、お前、いい加減にしろよ！

工藤 なんだだよ。過去をなかったことにすんなって言ったのは倉本だろ？……ほら、湯山、全部、言っちゃえよ。いいじゃねーか、オレたち別に、仲良しでもなんでもなかったんだから！

芹澤 やめてよ！そんなの……ウソ！ねえ、変だよこんなの、誰が悪いとか、誰かのせいとか……。私たち、昔からずっと仲良かったじゃない！あの時だって、卒業の記念に、一緒に夕日見に行こうって……、旧校舎の屋上から、朝峰で一番綺麗な夕日が見えるからって……、みんなで……。

倉本 ……お願い……お願いだから……もう、やめて……。

全員黙る。

部屋の外から再び合唱が聞こえてくる。

芹澤が突然、同じ曲をを歌い始める。

あつげにとられて芹澤を見つめる一同を尻目に、  
必死に声を張り上げる芹澤。

やがて、芹澤に引きずられるように、  
ひとり、またひとりと合唱に加わっていく。

歌が最後のフレーズに差し掛かった時、  
窓の外から強烈な光が差し込んでくる。

光が図書室を満たす。

強烈な光が舞台から客席まで照らし、  
全員の目を眩ませる。  
眩しさに顔を伏せる一同。

その時、倉本がひとり、窓に向かって歩み寄る。

倉本  
きれい……。

合唱の終わりに合わせて光もフェードアウト。

再び落ち着きを取り戻した図書室。  
しばらく誰も何も言い出せない。

芹澤  
校舎がなくなつたから……。あの日に見れなかつた、朝峰で一番の夕日が……。

やっと、今日……。

うん……そうだね。

倉本  
……バカみたい。

全員倉本を見る。

倉本  
バカみたい。皆で歌を歌って、夕日を見て、それで何が変わったの？私の目が見えるようになったの？何も変わらないじゃない！

長い沈黙。

若菜  
あ……。

若菜が図書室に入ってくる。

若菜  
申し訳ありません……。そろそろ、鍵を閉めなければならないのですが……？

鴨木  
あ、すみません。すぐに出ますから。

若菜  
あ、そんな、急がなくてもいいですよ。ゆっくりとご準備ください……。あの、それより、皆さんに聞いて欲しいことがあります……。実は、皆さんが羨ましくて、私、さつき思い切って小学校の同級生に連絡とってみたくて……。そうしましたら、思った以上に盛り上がってしまつて……。さつそく、今度、同窓会を開くことに。

鴨木  
はあ……。

若菜  
やっぱり小さい時に一緒に過ごした友達っていうのは、ずっと残ってるもんなんですね。一生消えない絆っていうか……。本当、それに気づいたのは、みなさんのお蔭です。

倉本　　そうですか、楽しい会になるといいですね……。残念ながら、私たちの方はもう、2度と会うことはないんですが。

若菜は倉本の言葉に戸惑うが、部屋の雰囲気を押されて何も言えない。

倉本　　それじゃ、私、帰るから。

倉本がカバンを持って立ち上がる。

湯山が慌てて手を取ろうとする。

倉本　　あの……。若菜さん……。でしたよね。入り口まで送って頂けませんか？あと、タクシーも呼びたいんですけど。

若菜　　あ、ええ、はい。任せてください。

若菜が倉本の手をとって部屋の入り口まで付き添う。

湯山は黙ってそれを見送る。

倉本が入り口で皆の方を振り返る。

鴨木　　じゃ……。また。

倉本　　「また」はもう、ないけどね。

沈黙。

倉本　　でも……。最後に、皆で、夕日を見てよかった……。ようやくこれで、私も卒業できそうだよ。

暗転。

明転。

合唱が大音量で流れる。

カーテンコール。